

関西学院同窓20万人の皆さん、 同窓会をもっと魅力的な組織にしていきたいと思います！



21年間同窓会の発展に尽力いただいた木村正春会長に代わり、この4月に松下電器産業株式会社相談役の森下洋一氏が就任されました。新会長就任のお披露目といたしまして、20万人を抱える関西学院同窓会と学院の将来について、山内二郎関西学院理事長との対談を企画いたしました。関学に対する熱い思い、同窓ネットワークのさらなる強化など、今すぐにも実現しそうな具体的なお話を数多くうかがうことができました。

関西学院での4年間は私のベース。

山内 今般、木村会長からバトンを継がれ、森下先輩が新会長に就任されたことは、関西学院20万の同窓はもちろん、学院関係者一同にとっても大きな喜びであり、心強い限りです。4月中旬に新たな同窓会メンバーで行われた第1回評議員会での会長挨拶の中で、「4年間という短いキャンパスライフだったけれども、その間に学んだ『Mastery

for Service』という建学の精神が、自分の一生の指針になっている」と語られました。同窓会長からのメッセージには特別な意味と説得力があり、私たちも励まされます。

森下 まず、21年お勤めいただいた木村前会長には、大いなる敬意と感謝を申し上げます。関西学院の同窓会は東の慶応義塾と並んで日本の大学の双璧ではないかと常々感じており、たいへん誇らしく喜ばしいことです。と同時に、この度20万同窓の会長という大役を引き受けることに大きな責任を感じています。

卒業生の皆さんが実社会で切磋琢磨し個人を成長させておられる一方で、関学のOB・OGとしては、やはりスクールのモットーである「Mastery for Service」を守ることで、つまり社会に対する「奉仕のための練達」を忘れず、実行していくことが大切です。今後、皆様方のご支援をいただきながら、関西学院にとってなお一層力強い同窓会に進化をさせていきたいと考えています。

兵庫県の出身の私にとって関西学院は憧れの学校でした。大学に入学した後は、高校時代から打ち込んでいたバレーボール部に郷里が同じ先輩に誘われて入部しました。4年生の時にはキャプテンを仰せつかり、運よくインターカレッジで優勝することができました。関西勢が全国制覇したのは戦後初めてで、「秩父宮杯が箱根を越えた」と讃えていただいたことを覚えています。私はこのバレーボールを通じて「プロセス」というものの大事さを学んだように思います。スポーツは勝負事です

からももちろん勝つことも大切なのですが、それよりも勝利へ到達するまでのプロセスにおいて、人に負けない努力をするということの尊さを当時の先輩から学び、また実践できたということの方が社会に入ってから自分に役立っているように思います。



山内 一郎 理事長

略歴

昭和33年3月 関西学院大学神学部卒業
昭和35年3月 関西学院大学大学院神学研究科修了
平成7年4月 関西学院大学神学部長に就任
平成8年4月 関西学院院長に就任
平成14年4月 関西学院理事長に就任
平成16年4月 関西学院大学名誉教授に就任



森下 洋一 同窓会会長

略歴

昭和32年3月 関西学院大学商学部 卒業
昭和32年4月 松下電器産業株式会社へ入社
平成5年2月 同社 代表取締役社長に就任
平成12年6月 同社 代表取締役会長に就任
平成18年4月 関西学院第12代同窓会長に就任
平成18年6月 松下電器産業株式会社 相談役に就任

また、所属していた商学部では、増谷ゼミで会計学を基礎から学びました。BS、PLなどの専門知識は、経営者になってから非常に役立ちました。それと同時にゼミを通じて人間関係、ヒューマンネットワークも貴重な財産です。



このように、関西学院に通っていた頃はいろんな方にお世話になったことばかりが印象に残っています。実質4年間しか学んでいませんが、10年間くらいいたかのような密度の濃い時間を過ごしました。関西学院に入って良かったと思っています。

山内 私は中学部から大学院まで12年間関西学院に通い、神学部を昭和33年に卒業しました。したがって森下新会長のちょうど1年後輩にあたります。この1年の差はぜったいに埋まらない(笑)。スポーツは相撲とマラソンだけが少し得意で、クラブは宗教部に入り、聖歌隊の伴奏などもつとめました。が、学生YMCA活動を通して全国国公私立の大学生とディベートをするなど、振り返ればやはり他流試合でずいぶん鍛えられたと思います。

今、会長から「プロセス」が大事だ、というお話をうかがった。その中で松下を選んだのは、とても若い会社であったということ、自由奔放に仕事ができる環境があったということ、そして最後に松下幸之助がいたということの3つが大きな理由として挙げられます。

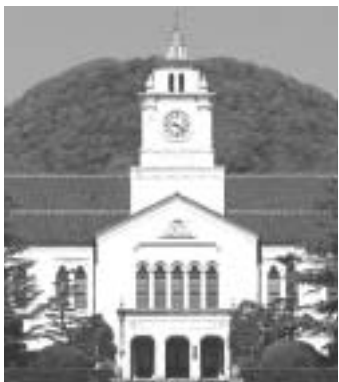
松下幸之助は昭和7年に、「企業とは、社会の公器である。世の中の発展に、人々の幸せに貢献することが、わが社の使命である」と宣言しています。この言葉と関学のスクールモットーである「Mastery for Service」は、ルーツの部分で非常に似ていて、私自身入社前にたいへん共鳴したことを覚えています。人間は何かを任せられると能力の100%以上を発揮できます。松下では入社前の期待通りどんな仕事を任せられ、たくさんの経験を積むことができました。「利益とは社会への貢献の度合いによつて、社会から還元されるものである」という考え方も、入社2〜3年後、その真意を理解できるようになりました。



いましたが私も全く同感です。人生行路というものは、なかなか自分の納得できるゴールにはたどり着けないものです。しかしスタートを切った以上は、目標に達するまでの過程を大切に、一歩でも半歩でも前に向けて歩み続けなくてはなりません。そのような生き方を学生時代に体得することはすばらしいと思います。関西学院には根底に流れる確かな校風、1000年を超える歴史が培った「関西学院のDNA」とも呼ぶべき見えない大切なスピリットがあります。私たち同窓はこの精神を心に抱きつつ、この宝をどのように生涯の中で活かしていくかを、常に自覚することが大切だと思います。

お世話になった関西学院に恩返しをしたい。

森下 まず私が関西学院を卒業して、なぜ世の中にたくさんある会社の中から松下を選んだかというところからお話を始めたいと思います。私が入社した昭和32年は、松下が大学定期採用を始めてまだ間もない頃で、今ほど大きな企業ではありませんでした。



した。松下と関学の根本には、理念的に深く相通じるものが存在していると私は感じています。

このように、松下の理念に共感しながら思う存分仕事をしてきた積み重ねが、結果として社長就任につながったのだと感じています。ただ入社した時はもちろん役員の時でも、まさか自分が社長になるとは思っていませんでした。それよりも理念を追求している過程、精一杯仕事に向きあっている過程が大事だいつも考えていました。

計13年間の社長・会長を含めた松下での50年間は、30万人を超える従業員の方々、お客様、ステークホルダーの皆様など、あらゆる人々の教えのおかげで務めることができましたと感じています。ですから任務を終えた今後は、私を支えてくださった社会に対してお返しをしていきたいと考えています。世の中というものは支えられたら今度は支えるというのが順序です。今後はひとつでもふたつでも世の中の皆様のためにお尽くしできればと思っています。この事は私の新たなミッションだと思っています。

昨年の秋、木村前会長が3月末に退任されるということで、現在の同窓会副会長から強い要請をいただきました。お話をうかがった時「自分も社会に対して、お返しをしていく年回りになったのかな」と感じ、関学同窓会を盛り上げることも自分に与えられた使命であると受け止めました。正直「大変そうだ」とも思ったのですが、関西学院は自分の人格の基礎を育てていただいたところですから、そのことに対して恩返しをしていくという本質的な気持ちの方が強く出たということです。

「関学改革のポイント」は「スクラップ&ビルド」。

山内 関西学院のスクールモットーと松下電器の企業理念が深いところで響きあっているというお話、たいへん興味深く聞かせていただきました。ベッツ先生が提唱された「Mastery for Service」の真の意味は、「Mastery for SOCIAL Service」です。しかし「Mastery for SELF Service」だととり違えている人の多いことが問題です(笑)。先日会長が「会社も学校も理念がなければ滅びる」とおっしゃっていましたが、「Mastery for Service」のほうがすばらしいモットーの真意をもっと学生生徒の皆さんに熟く吹きこんでいかなければならない。関西学院の未来も、絶えず原点に立ち返ることから新たに拓かれていくのだと思います。

現在、大学を取り巻く競争環境は激変し、関西学院もひとつのターニングポイントに直面しています。しかし私たちはむしろこの危機をポジティブに捉え、こういう時だからこそ大きく飛躍する好機にしたいと願っています。関西学院は今年創立117周年で、3年後には120周年を迎えます。その間初等部の開設や大学新学部を設置をはじめ



いかなければなりません。事業でいう「スクラップ&ビルド」です。現在の関学の改革は大変に良い方向に向いていると思いますので、なおのこと新しいものを加えていくだけでなく、難しいことだと思いますが、次に向けての「スクラップ」も忘れないでいただきたいと思えます。

ふたつ目は、ドッグイヤーと言われるほどまぐるしく動く現代社会で、この「スクラップ&ビルド」を行う「スピード」の部分の聞きたいと思えます。

そして最後の3つ目は「見える化」です。この改革を学生にご両親に、世の中にしつかり伝わるようにしなければ、内部の改革に終始して、関西学院としてのまとまりを欠いたものになると思います。この3つを加味しながら改革を進めていくと、さらにすばらしい改革になるのではないかと思います。

山内 核心を突いたご意見ありがとうございます。私たちもいかにせん「ビルド&ビルド」に流れがちで、そこから抜け出て「スクラップ」することの難しさを痛感しています。一定の評価を得たものでも、常に「リフォーム」を試み、役割を終えたものは潔く終結(ターミネイト)させねばなりません。大切なアドバイスをきちんと受け止めたいと思います。



め大きな改革プロジェクトが目白押しです。しかしながら単なる拡大路線を突っ走るではありません。しっかりと財政基盤をともなう適正規模の創造的改革を押し進めるべきだと考えています。

教育理念としては、やはりキリスト教の倫理的価値観を基にした全人教育が今後とも基本になります。よく引き合いに出す例ですが、YMCAのシンボルマークが逆三角形をなしています。これはMind、Body、Spiritの3つがバランスよく備わった統体としての人間を表しています。今の若者は頭と体はそれぞれものすごく発達しているのですが、それを結びつける精神の部分が未熟であると感じます。関西学院では何よりもこの精神面の練達を大切にして、グローバル時代の担い手になれる真に豊かな人格形成を目指したいと考えています。

森下 現在学院は、非常に適切な方向に、最適な規模で動いておられると思います。ただこの改革に対して私なりの意見を3つ言わせていただきます。

まずひとつ目ですが、この30〜50年の間に、世の中はグローバル化、少子化をはじめ、産業構造、社会構造もどんどん変化し、あらゆる業界が改革の必要性に迫られており、もはや30〜40年前の仕組みでは通用しなくなっています。その中で大切なことは、「選択と集中」です。いろいろな改革を行うことはすばらしいことですが、ただ新しいことを上積みしていくだけでなく、古いものを壊していくことも大切です。その時何が求められるかを考えて常に組織の入れ替えを行って



森下 今、小泉総理が行政改革を行っておられますが、改革は行政よりも民間の方が一歩先に進んでいます。企業業績は回復していると言われますが、回復している企業はやはりそれだけの構造改革を行っています。しばしば企業の格差が問題になりますが、結果を出している企業は並々ならぬ痛みを経験しているからこそ高い利益を獲得できるのです。痛みをともないながら英断をくだし、改革を行い、それが何年かかかってやっと結果が出てくる。改革とはそういうものです。だから目先の少々の痛みにとらわれず、先のビジョンに基づき、強い意志を持って進めなければなりません。

そして改革を行っていること自体を世の中に知らせていく「見える化」が大事です。組織の人数が多くなればなるほど、絶えず具体的なメッセージと具体的な事例を見える形で発信していかなければなりません。そういう意味では、いろいろな会合にたくさんのお越しいただき、関西学院の現状を報告していくことは、「見える化」の実現です。さらにその場で報告を聞いた人が出会った人に喧伝されていくことで「関西学院の今」が広く伝わっていくのです。

